

## 第4回研究会・総会報告

1999年3月21日(日)早稲田大学で行われた第4回研究会・総会の様子をまとめてみました。当日は、約120名の参加者で、前回は上回る熱気に満ちた話し合いが行われた。

**<シンポジウム>** 午前10:00-12:00

山本章雄氏(大阪府立女子大学)の司会でシンポジウムが進められ、大変活発に議論された。特に昨年行われた世界選手権に関する事柄で、日本男女チームがおかれている厳しい現状を踏まえながら、如何に日本のバレーボールを再建していけばよいかについて話し合われた。ここでは提言された方の発表要旨を掲載し報告と致します。(編集委員 高橋宏文)

### 1. 「世界から見た日本のバレーボール」

前田 健氏(日本文化出版)

昨年11月、約1ヶ月に渡り、日本全国各地で盛大に開催された世界選手権では、男女ともホームのアドバンテージを生かせず、決して満足と言える成績を残すことができなかった。その中で、男子は15位という成績に終わったものの、一部の選手は高さ、パワー、テクニクともに、世界の強豪に見劣りしないプレーを見せてくれたが、8位に終わった女子はチーム、個人どちらの観点からも、やや水をあげられていたように思う。

低迷が叫ばれる昨今のバレーボール界であるが、これは決して選手の体格や技術だけの問題ではなく、日本の指導者の勉強不足が大きな原因としてあげられる。3月に開催された春高バレーにおいてもしかりである。

まず、解説をして残念に思ったことは、タイムアウト時の監督の指示には、「我慢だ」「頑張れ」といった精神面のことばが多く、具体性を欠いていたことである。タイムアウトでは、30秒間という短い時間の中で、選手個々がどうすればよいのか、作戦面や技術面でもっと具体的な指示をすべきではないだろうか。

次に、技術指導においては、セッターの養成が急務である。日本においては、指導者もしくはアタッカーのセッターに対する注目が具体的ではないため、トスの細かい調整能力に欠ける面がある。そのため、アタッカーは十分なフォームでスパイクすることができず、諸外国の高いブロックを打ち抜くことができない場面が多く見受けられる。(日本人の多くはスパイカーの実力不足を中心に考えがちであるが、それ以前のトス自体にも大きな問題があるのではないだろうか)。世界のトップレベルのチームには、特に二段トスも含めて、かなりスパイカー好みのトスを正確に上げられるセッターが多い。

さらに、日本の長所だと定説のあるレシーブに関しても、決してよいとは言えない。特に、ポジショニングの悪さがその例である。指導者にゲームプランやビジョンの具体性がないため、チームとしてのレシーブ力が向上していない。もっと、次の攻撃につながるレシーブと、そのポジショニ

ングを指導する必要性がある。これらのことに関しては、指導者ばかりではなく、選手にもっと目的意識を持ってほしい。自分がどんな選手になりたいかという目標を持って、それを目指して自分から積極的に行動を起こせるし、今以上の自覚も生まれてくるはずである。

協会やチーム関係者も、選手をより成長させるために、例えば、オフェンスコーチ、ディフェンスコーチ等を置くなどして、コーチの分業制を図り、選手のコンディション管理を優先させることが必要であろう。さらには、下部組織からの指導の体系化や一貫性のある指導方法の確立が急務である。

最後に、日本のバレーボール界に携わる人々が、指導やプレーについてもっと勉強を重ね、お互いを刺激し合って、バレーボール界全体が成長していくようなファミリーを確立していかなければならない。そうしなければ、日本はますます世界から取り残されていくだろう。

### 2. 「スポーツマネージメントの立場から見たバレーボール世界選手権」

小島和行氏(世界選手権大会事務局長)

2000年前後に世界的イベントの日本開催計画は皆無であった。1989年当時のJVAリーダーによるバレーボール競技の将来的プロモーション活動を継続するための1998世界選手権日本開催の判断と決断があったからこそ、大会が近来希にみる大成功に終了し、バレーボールの将来的発展に貢献できた。

大会のマネージメントとは、まず第一に組織組成(ADカード登録は役員の確保と編成、及び大会の社会的位置づけに必須)と業務分掌の計画、同時に予算編成である。また、片方では常に大会のイメージを頭に描き、一歩づつ具体化に努力することだと考える。幸いにも我々には日本開催ビッグイベントの歴史と経験がある。ワールドカップ1977が1964東京オリンピックの組織運営を見本にしたように、世界選手権もハンドボール男子世界選手権をはじ

め、多くのイベント運営を参考にし、他のイベントに負けない素晴らしい大会にと心がけた。

我々は、如何にして一般の方々を世界選手権に注目させるか、大会の雰囲気作りを重点に、試合会場の外から注目される大会を目指した。直径6mのモンスターカラーボールの設置、試合会場内外の幟、カラーロールバーナー、看板等々の設置、政財界や多くの芸能人にもご参加いただいた開閉会式、試合会場内のエンターテイメント等、あらゆる角度から検討を重ね、アイデアを振り絞りながら多くの方々のご協力を得て実行した。

記念切手発行についても、大会のステータスを高めることと、日本のバレーボール界から離れた組織をも認める大会としての位置づけが、昨今の低迷を続ける日本男女バレーボールのイメージを払拭するのに必要なことの一つであった。3,000万枚が売り切れたことから、この企画の成功がうかがえた。

予算執行にあたっては、本部が緊縮財政を掲げた以上は、制作物等の二次、三次利用に努めた。一方では最低必要経費を捻出するための資金の不足が予想されたため、資金調達の施策を講じ、世界バレーボール界最大の商品価値を持つ世界選手権のセールスに集中しなければならなかった。入場券販売促進についても、ただ黙って売れることを待つのではなく、思い立つアイデアを積極的にフル活用し、可能な限りのフットワークを生かした「手売り作業」を中心に実践した。金が無い場合の無いなりの大会運営とは、全てに臆することなく、積極的にPRし大会の認知度を高め、ネガティブにならず、あらゆることに対して果敢に挑戦する事に他ならない。

主たる業務内容は以下の通りである。

- a. 予算編成 b. 総務・IDカード c. 表彰式典
- d. 広告宣伝 e. 競技運営、施設警備、医事
- f. 宿泊輸送 g. マスメディア h. 入場券
- i. 広告協賛スポンサーの獲得
- j. UNHCR への協力 k. 記念郵便切手の発行

いずれにしても、これだけの一大事業を成し遂げるためには、多勢のフルタイムワーカーと同じプログラムを専門的に実践できるプロフェッショナル・オーガニゼーション(プロ集団)が必要であった。

そういった意味で「バレーボール界の組織のプロ化」は21世紀を担う若い方々の意識改革からはじめ、今後のポジティブな活動を期待したい。

### 3. 「選手の立場から見た世界のバレーボール」

加藤陽一氏 (全日本男子チーム)

- 1) 個人的にはスパイク、レシーブ、サーブなど全ての面で自分でも世界で十分に通用すると感じた。
- 2) 世界の高さについては、二段トスのスパイクのときに相手の高さを感じたが、サーブレシーブからの攻撃の時には感じなかった。2人・3人のブロッカーがきたときのプレッシャーの大きさが、世界の高さと感じた。
- 3) パワーについては、高さパワーだけで勝負してくるキューバだけが特別であると感じたが、そのほかのチームには感じなかった。キューバは中途半端なブロックの手の出し方ではブロックがはじかれてしまう。それから、ネット上の1対1の押し合いに強いという印象を受けた。
- 4) ブロックについては、リードブロックでは日本のブロックは効果的でないと感じた。世界のトップクラスのブロックは、サイドのプレーヤーがいかにかセンターブロッカーをカバーできるかということが重要視されているようだ。
- 5) サーブについて、サーブ力の違いが強さの違いであると感じた。今回のルール改正後は、ジャンプフロッターサーブの方がスパイクサーブよりも有効になってくるのではないかと感じた。
- 6) レシーブについては、ヨーロッパのチームのほうが、頭上のボールや左右のシングルハンドレシーブにおいて優れていると感じた。外国のチームはワンタッチボールの処理でオーバーハンドレシーブがうまい。
- 7) 戦術については、特に目新しいものはなかった。ただ、外国のチームはクイックの打点がネットから離れていて、足の長いスパイクを打っていた。これと同じで、スパイク全般をネットから離して、打点を作っており、視野を広げてスパイクしていく必要があると感じた。
- 8) 日本人の能力について、世界との差はそれほど大きくないと感じた。ユニバーシアードを経験して、大学生まではトップ4にいるにもかかわらず、それからの成長に問題があるのではないかと感じた。これから企業に入り、企業チームに所属するが、企業チームに何か特別な問題があるのではないかと感じた。それから、企業と協会が連携をして、選手の成長の方向性を明確にしてもらいたい。そして、選手の意見を取り入れる姿勢を協会に持って欲しい。
- 9) 世界選手権を終えて、特に感じたのは人間性の重要性である。今後はプレッシャーをまともに受け止めず、自分の信念を持って選手として向上していきたい。